

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00520

研究課題名（和文）言語における経済性条件の再検討

研究課題名（英文）Reconsiderations of economy conditions in language

研究代表者

高橋 大厚（Takahashi, Daiko）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：00272021

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生成統語論で従来仮定されてきた経済性条件のうち、最大削除条件を取り上げ、その効果が通言語的に観察されるかどうか、及びその効果を他のより一般的な仮説から演繹できるかどうかを考察した。中国語の削除現象を詳細に検討した結果、同一の構造に疑問節縮約（スルーシング）と項削除の両方が適用可能な場合、項削除の適用が阻止されること、及び同一の構造に動詞句削除と項削除が適用可能な場合、やはり項削除の適用が阻止されることを観察した。これまで主たる考察対象とされてきた英語とは異なる中国語でも当該効果が観察されたことにより、その普遍性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、最大削除条件に関する研究は主として英語のデータをもとに行われてきた。本研究は、英語とは異なる文法的特徴を持つ中国語を考察対象にして、同条件の普遍性を確認し、同時に削除現象の研究に中国語が有用であることを示した。また、同条件の研究は従来、疑問節縮約と動詞句削除の組み合わせを考察することで行われてきたが、本研究はこれに項削除を加え、新しい知見を提供した。

研究成果の概要（英文）：This study considered economy conditions assumed in generative syntax, focusing on what has been called MaxElide in the literature. It examined whether the effects of the condition can be observed cross-linguistically and whether its effects can be deduced from more general assumptions. By examining deletion phenomena in Mandarin Chinese closely, this study found that when sluicing and argument ellipsis are applicable to the same structure, the latter is blocked, and that when verb phrase ellipsis and argument ellipsis are applicable to the same structure, the latter is precluded. These findings indicate that the effects of MaxElide are observable in Mandarin Chinese, which is different in several important ways from English, on the basis of which most previous studies were conducted, lending credence to the cross-linguistic presence of MaxElide.

研究分野：言語学

キーワード：削除 省略 スルーシング 動詞句削除 項削除 経済性条件 最大削除条件

## 1. 研究開始当初の背景

生成統語論では 1990 年代以降、統語的派生と表示にはある種の経済性条件が適用するという仮説のもと、様々な言語現象の分析において複数の経済性条件が提案されてきた。例をあげると、派生のステップの数を最小にすることを求める「最小ステップ条件」、移動の距離を最短なものにする「最短移動条件」、移動をうける要素をできるだけ小さなものにする「最小要素移動条件」、削除は可能な限りより大きな要素に適用するという「最大削除条件」がよく知られている。

これらのうち、最短移動条件と最小要素移動条件は、移動理論の進展に伴い、経済性条件としての位置付けは見直されている。対して、最小ステップ条件と最大削除条件は、それらを他の一般原理や条件から導き出すという試みもあるが、現在でもある程度、経済性条件として仮定されている。

人間の言語能力の理論モデルを最小の道具立てで構築することを目指す現在の生成統語論の考え方のもとでは、そのような経済性条件が本当に人間の言語能力に組み入れられているのかという問いを立てることができる。また往々にして、上述の経済性条件は従来英語の現象の分析に基づいてなされてきたが、それらの理論的位置付けの考察は、より広範かつ詳細なデータに裏付けられることが望ましい。

## 2. 研究の目的

本研究は、上記の背景を踏まえ、これまで提案されてきた経済性条件のうち、最小ステップ条件と最大削除条件の 2 つに焦点を当て、それらの効果が通言語的に観察されるかどうかを検証し、また、当該の効果が通言語的に存在する場合、それらを他の一般原理から演繹することが可能かどうかを検討する。それにより、上記 2 つの経済性条件の通言語的通用性や理論的位置付けを明確にし、人間の言語能力およびそれを包摂する認知能力における経済性の在り様の解明に貢献することを目指す。

## 3. 研究の方法

まず、最小ステップ条件と最大削除条件の効果が英語以外の言語でも観察されるかを、英語以外の言語について検証する。申請者および研究補助を担当する大学院生が関連するデータを作成し、インフォーマント調査を実施する。調査は各言語の母語話者を対象とし、面談もしくはオンラインでのアンケート調査とする。

次に、最小ステップ条件と最大削除条件の効果を、より一般的な理論構成物を用いて導き出せるかを検証する。当該 2 条件が関わる統語構造を精査し、他の仮説からその効果を演繹できるかを明らかにする。

## 4. 研究成果

最大削除条件の効果の有無を検証するには、複数の種類の削除操作が観察され、かつ削除を受けられる構成素の内部から顕在的な疑問詞の移動が可能な言語を考察する必要がある。

... 疑問詞 ... (XP) ... (YP) ... t ... ] ... ] ... (t は移動の元位置を表す)  
削除? 削除?

本研究ではそのような言語として中国語を選び、同一の文に複数の削除操作が適用できる場合に、どのような相互関係があるかを検証した。研究代表者が指導する大学院生の研究により (Tan (2020)), 中国語では疑問節縮約 (スルーシング、時制辞句削除) と動詞句削除が同一の構造に適用可能な場合、後者の適用が阻止されることが観察されていた (つまり、その 2 つの削除操作の組み合わせでは最大削除条件の効果が観察される)。本研究では、これらに目的語や動詞に選択される従属節を省略する項削除を加え、3 種類の削除操作の相互作用を検証した。その結果、以下の 2 つの成果が得られた。

(1) 同一の構造に疑問節縮約 (時制辞句削除) と項削除が適用可能な場合、後者の適用が阻止されることがわかった。

... 疑問詞 [時制辞句 ... [従属節 ... *t* ...] ...] ...

削除可.      削除不可

この疑問節縮約と項削除の組み合わせで最大削除条件効果が観察されるという発見は、中国語統語論では従来にないものであり、新しいものである。また、研究代表者は過去の研究で、日本語において同様の削除操作の組み合わせで同効果が観察されることを指摘していたが、そのことの証左となるものである。

この考察において、副次的なことであるが、項削除の適用を受けた従属節からの移動が(最大削除条件に違反しなければ)可能であることが観察された。中国語の項削除は日本語の項削除と異なる特徴を持つことが研究代表者自身の従来の研究 (Takahashi (2014, 2020)) で指摘されてきたが、内部からの移動を許容する場合があるという点では共通点もあることがわかった。

(2) 同一の構造に動詞句削除と項削除が適用可能な場合、後者の適用が阻止されることがわかった。

\_\_\_\_\_ |  
... 疑問詞 ... [動詞句 ... [従属節 ... *t* ...] ...] ...

削除可.      削除不可

この動詞句削除と項削除の組み合わせで最大削除条件効果が観察されるということは、中国語統語論はもとより統語論研究全般において新しい発見であり、削除に関する研究に重要な考察対象を加えたことになる。

特にこの発見は、最大削除条件に関する最近の論考である Griffiths (2019)の提案の妥当性を疑わせるものである。Griffiths (2019)は、英語において同一の構造に時制辞句削除と動詞句削除が適用可能な場合に後者の適用が阻止される事実は、最大削除条件により説明することは妥当ではなく、そもそも削除を受ける構成素から要素を移動させること自体が許容されないのであって、削除される時制辞句からの疑問詞の移動が許容されるのは語用論的な特別なことがあるからだと主張する。本研究では、動詞句削除と項削除の組み合わせでも最大削除条件の効果が観察されることを指摘したが、Griffiths (2019)によれば、いずれの削除操作も許容されないはずである。本研究の発見はGriffiths (2019)の分析への反例となる。

#### 参考文献

- Griffiths, J. (2019) Beyond MaxElide: An Investigation of A'-movement from Elided Phrases. *Linguistic Inquiry* 50, 571-607.  
Takahashi, D. (2014) Argument Ellipsis, Anti-agreement, and Scrambling. In M. Saito ed. *Japanese Syntax in Comparative Perspective*. 88-116. Oxford University Press.  
Takahashi, D. (2020) Derivational Argument Ellipsis. *The Linguistic Review* 37, 47-74.  
Tan, Q. (2020) On MaxElide Effects in Mandarin Chinese. MA thesis. Tohoku University.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Daiko Takahashi	4. 巻 37
2. 論文標題 Derivational argument ellipsis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Linguistic Review	6. 最初と最後の頁 47-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/tlr-2019-2034	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daiko Takahashi, Qinyi Tan	4. 巻 -
2. 論文標題 A Note on MaxElide: Interaction of Three Types of Ellipsis in Chinese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金子義明先生退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Daiko Takahashi
2. 発表標題 What can Japanese tell us about linguistic theory and vice versa?
3. 学会等名 50 Years of Linguistics at UConn (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Qinyi Tan, Daiko Takahashi
2. 発表標題 MaxElide in English and Chinese
3. 学会等名 Nanzan Workshop on Comparative Syntax and Language Acquisition (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------